

二年か三年前の十一月十三日夕刻のNHKのテレビ放送で、赤穂義士討ち入りの報(しらせ)が上賀茂にまでもたらされたとの記述が上賀茂神社古文書のうち「清茂日記」(中大路姓のち岡本姓、延宝七年(1769年)一宝曆三年(1783年))に残されていることが、国立京都博物館学芸課長 下坂守先生の解説により放映されましたので、関西に在住の方には「記憶の方も多いと思いますが、今一度「清茂日記」の該当部分を載せ、今時東京の情報も瞬時にして京都に届く時代からすれば当時東京(江戸)から京都まで九日間も要した事も驚きであります。岡本清茂が日記の最後に「珍重々々」と記しているのは将に「珍重」ではありませんか。ご一読ください。

『清茂日記』 元禄十五年十二月二十三日条(西暦一七〇二年)

頃日頗風聞有之、浅野内匠殿家来頭立之者、四十八、九人斗致一同、去十四日之夜七ツ時吉良上野介殿屋敷へ忍入、上野殿併子息等討取(後二間於子息者不取打取云々)、其外家来七十余人切殺、件之上野殿併子息首鍵(槍)二貫之、内匠殿菩提所仙覚寺(泉岳寺)江右四十九人共二相詰、於内匠殿墓前申右之次第備旨云々。但旨趣者、定而有少異敷追々可知之、是者先年内匠殿大樹殿中被切上野殿、仍而内匠殿之事者、被任制法当座切腹不被立跡、上野殿事者、逼塞被仰出、無別儀之間、内匠殿家来鬱憤不散、今度討主人之敵云々。
珍重々々。

『右の書き下し文』

この頃頼りに風聞これあり。浅野内匠頭家来頭立つの者、四十八、九人ばかり一同致し、去る十四日の夜七ツ時吉良上野介殿屋敷に忍び入り、上野殿ならびに子息ら討ち取り(後に聞く子息においては打ち取らずと云々)、その他家来七十余人を切り殺し、件の上野殿ならびに子息の首を槍でこれを貫き、内匠殿菩提所の仙覚寺(泉岳寺)へ右四十九人と共に相訪れ、内匠殿の墓前において右の次第を申して首を備(供)えりと云々。但し旨趣(事のわけ)は定めて少異あるか追々にこれを知るべし。これは先年内匠殿が大樹の殿中にて上野殿を切られ、これによつて内匠殿の事は制法に任され、当座切腹、跡を立たされず、上野殿の事は逼塞を仰せ出され、別儀無きの間、内匠殿の家来は鬱憤が散らず、このたび主人の敵を討つたと云々。珍重々々。